



TITLE:

### 3.研究会(III 共同利用研究)

AUTHOR(S):

---

CITATION:

3.研究会(III 共同利用研究). 霊長類研究所年報 1988, 18: 78-81

ISSUE DATE:

1988-09-30

URL:

<http://hdl.handle.net/2433/163780>

RIGHT:

### 3. 研究会

#### 分布限界域におけるニホンザルの生息環境と 地域個体群の動態

日 時：昭和62年6月8～9日

場 所：京都大学霊長類研究所

参加者：約30名

#### プログラム

1. 北アルプス槍ヶ岳周辺のニホンザルの生態  
泉山茂之（プレック研究所）
2. 黒部川流域のニホンザルの分布と個体数  
赤座久明（富山大沢野中学校）  
加藤 満（高蔵寺高校）
3. 奥羽山脈のニホンザル  
遠藤純二（石巻・東浜小学校）
4. 日光におけるニホンザルの地域個体群の構造  
小金沢正昭（栃木県立博物館）
5. 屋久島上部域の群れの例から  
好広真一（竜谷大）
6. 下北M群の非積雪期の遊動と土地利用  
岡野美佐夫（野生動物保護管理事務所）
7. 下北M群の秋と冬の摂取エネルギー：性、年齢クラスによる差  
中山裕理（北大・農）
8. 下北半島西北域の森林植生と個体群動態  
森 治（大畑小学校）  
和田 久（第3田名部小学校）
9. 下北半島ブナ・ヒバ林での森林施業と植生回復  
荻野和彦（愛媛大）  
二宮生夫（ ）
10. テレメトリーの改良と開発  
羽澄俊裕（野生動物保護管理）

#### 総合討論

世話人：東 滋、鈴木 晃、渡辺邦夫、足沢貞成

最初の2題は本州中部山岳での分布個体数と環境利用に関係し、北アルプスの中央部黒部川的全流域と高瀬川周辺の相接する地域での仕事である。山地帯上部から高山帯にかけてを利用する群れの動態についての予備的報告と、広域の分布様式のひとまずのまとめはニホンザルの生態学の上で、

新しい地平を拓くものといって良い。

遠藤氏は宮城県下のサルの分布の現状と歴史的分布について、小金沢氏はテレメーターを駆使して群間関係が土地利用にどう投射しているかという観点からの分析を話された。

次の2つは下北M群についてのここ3～4年間の新しい成果で、中山・綿貫氏は冬期の採食生態について、岡野氏はこれもテレメーターを使って非積雪期の遊動と土地利用をとらえた。森・和田氏は下北西北域での国有林施業とサルの分布の変動を歴史的にまとめた。

二宮・荻野氏は下北のブナ・ヒバ天然林域での施業後の更新についての10年後の再調査データからヒバの更新特性をまとめ、望ましい森林のとりあつかいにふれた。

討論の時間は少なくなってしまったが、高所および北の分布限界での土地利用、遊動域の構造が山域の深さと植生帯の配置とのからみで異なった様相を呈することがよく解かった。個体群動態と分布との関連は今後の課題として残された。

研究技術の上で羽澄氏による位置テレメトリーの現状の紹介があり、2日目の午後実地講習会をおこなった。これも今後の研究の展開に役立つことと思われる。

（文責 東 滋）

#### 第17回ホミニゼーション研究会

日 時：昭和63年3月11日

場 所：京都大学霊長類研究所

参加者：約100名

#### プログラム

1. ホミニゼーショントピックス「はじまり」
    1. 宇宙のはじまり  
佐藤文隆（京大・理）
    2. 地球のはじまり  
松井孝典（東大・理）
    - 休 憩
    3. 生命のはじまり  
清水幹夫（国立宇宙科学研究所）
    4. ヒトのはじまり  
江原昭善（京大・霊長研）
- 3月12日
1. 共通テーマ「行動とホミニゼーション」
    1. マカクザルの種の認知

- 藤田和生(京大・霊長研)
2. チンパンジーのコミュニケーション  
早木仁成(京大・理)
  3. ピグミーチンパンジーの集団間関係  
加藤隆至(京大・霊長研)
  4. 対面相互行為のエソロジー……ブッシュマン  
と日本人の場合  
菅原和孝(北大・文)
  5. 子供にみる人間行動  
柴坂寿子(Max Planck Inst.)  
森下はるみ(お茶大・文教)
- 世話人: 江原昭善、竹中 修、松沢哲郎、大沢  
秀行

第17回ホミニゼーション研究会は、例年のごとく2日間にわたって開催された。今年度は長期間にわたって世話人会の中心的役割りを果たしてこられた河合雅雄、渡辺毅両氏が退官されたため、企画の段階で、トーンダウンしないように、とくに慎重にならざるをえなかった。

今年度の企画の特徴は、思い切ってトピックスに「はじまり」シリーズをもってきたことだろう。ホミニゼーションでは、いつも起源論が重要であり、自然の段階的進化を4節に区切り、そのシフト部分を各専門の研究者に論じて頂いた。

第2部では、霊長類および人間について、行動面の研究を下記プログラムに見られるように報告して頂いた。参加者100名を超える盛況で、世話人グループとしては安堵した次第である。

(文責 江原昭善)

## ミニ研究会

ヒト・チンパンジー・コンピューターにおける推論機能について

日 時: 昭和62年12月4日  
場 所: 京都大学霊長類研究所  
参加者: 約40名

### プログラム

1. 発達遅滞児およびチンパンジーにおける刺激  
等価性

山本淳一(慶大)

2. コンピュータによる推論機能の実現について  
岡藤 進(富士通、国際情報社  
会科学研究所)

司会者: 浅野俊夫(愛知大)

討論者: 酒井正樹(岡山大)、須賀哲夫(お茶  
の水女子大)、堀 浩一(国文学研究  
資料館)

世話人: 室伏靖子、松沢哲郎、久保田競、小嶋  
祥三

研究計画「チンパンジーの知能の分析」の課題で、知的行動の種々の側面について、ヒト・チンパンジー・サルと比較研究が試みられた結果、次の事実が明るみにでてきた。すなわち、もし「AならばB」という関係を学習すると、対称的な関係としての「BならばA」の学習が、ヒトの幼児では殆んど同時に成立するのに、チンパンジーにはできない。そこで、人工知能すなわちコンピュータではこのような推論機能はどのように考えられているかを知り、この問題について討論することが、本研究会において試みられた。

機械の学習や問題解決過程についての知識を拡張、チンパンジーの実験結果についての新しい指摘もあり、日頃の思考の範囲を拡げる好機会となったが、論理体系のみに依存している現在の人工知能研究に対して、生物学的な直観的発想の機能をどう扱うかについて、多くの疑問も提出された。

(文責 室伏靖子)

## 霊長類の情報受容と脳内伝達機構

日 時: 昭和62年12月19日  
場 所: 京都大学霊長類研究所  
参加者: 約30名

### プログラム

1. サル大脳皮質における神経ペプチドの個体発生  
山下晶子(京大・霊長研)
2. 脳のセロトニン神経系と定常形態  
遠山育夫(滋賀医大)
3. 霊長類神経系のモノクロナル抗体による研究  
藤田 忍(群大・医)
4. サル大脳皮質における口腔内触覚と味覚情報  
伝達処理機構

小川 尚(熊本大・医)

## 5. 脳におけるプロティンキナーゼの機能と生理的役割

高橋 進(山口大・教養)

世話人: 林 基治、景山 節、大島 清、三上章允、松村道一

山下は、マカクザル大脳皮質内ソマトスタチン細胞の個体発生的変遷を調べ、胎生期には成体期より細胞数が多い事を示し、本ペプチドが皮質発達に関与する可能性を論じた。遠山は、コンピューターを用いたセロトニン神経終末密度の定量化について述べた。この手法は、他の化学伝達物質へも適用され得るものとして注目された。藤田はサル大脳皮質に対するモノクロナル抗体を作製し、大型ニューロンを染める抗体を発見した。又、その抗原分子がプロテオグリカンである可能性を示した。小川は、go-no-go 課題(食塩水の時レバーを押し水の時は押さない)を訓練したサル味覚野のニューロン活動を記録し食塩濃度に依存して活動が増加したり減少するニューロンを発見した。高橋は、サル大脳より部分精製したカルモジュリン依存性プロティンキナーゼがシナプシンⅠをリン酸化する事を見出し、本酵素のシナプス伝達における重要性について述べた。本研究会は、短時間ではあったが密度高い討論が行われ、主催者側にとっても大変勉強になる会であった。

(文責 林 基治)

### ニホンザルの地域変異

日 時: 昭和63年 1月19日

場 所: 京都大学霊長類研究所

参加者: 約40名

#### プログラム

1. 白山のニホンザルの寒冷地適応  
水野昭恵(白山自然保護センター)
2. 毛色からみたニホンザルの変異  
浜田 稔(日本モンキーセンター)
3. 生体計測からみたニホンザルの変異  
渡辺 毅(相山女学園大)
4. タンパク変異からみたニホンザルの地域分化  
—DBP変異の地理的分布を中心に—

川本 芳(名大)

討論者: 和 秀雄(日本獣医畜産大)、野口 淳夫(筑波大)、竹中 修、岩本光雄(京大・霊長研)、稲垣晴久(日本モンキーセンター)、岩本俊孝(宮崎大)  
世話人: 庄武孝義、杉山幸丸、鈴木樹理、毛利 俊雄

水野氏は白山のニホンザルについて群れの分布、過去25年間の遊動域の変化、個体数の変動、冬の採食、100 kmをこえるオスの移動について報告した。浜田氏はニホンザルの毛色の地域変異、成長にともなう変化を報告した。多数の鮮明なスライドは捕獲調査の重要性を示した。渡辺氏は多年にわたる生体計測調査の成果を総括し、性差における地域変異、寒冷地ニホンザルの特徴について論じた。川本氏はニホンザルにみられるビタミンD結合性タンパクの変異について報告した。データの解析に派生形質を重視するクレイディズムの考え方を導入し、注目を集めた。

研究課題「ニホンザルの地域変異に関する研究」のまとめとしての本研究会を閉じるにあたって、対象をマカク全般に広げた新しい課題の設定が必要であろうと指摘された。(文責 庄武孝義)

### ニホンザル集団における優劣・順位の再検討

日 時: 昭和63年 2月8~9日

場 所: 京都大学霊長類研究所

参加者: 約40名

#### プログラム

1. 高崎山生息ニホンザルの人工餌場および自然林内における優劣順位と採食量  
横田直人・長岡寿和(大分短大)
2. ニホンザル餌づけ群における雌の繁殖に影響をおよぼす社会的要因  
浜井美弥(東大・理)
3. 餌づけ集団と放餌集団における攻撃行動  
待田昌二(阪大・人間科学)
4. 餌づけ集団における未成体の伴食関係と順位  
今川真治(阪大・人間科学)
5. 餌づけ集団における未成体雄の個体関係の変化  
渡辺義雄(美作女子大)

## 6. 幸島群の順位の継年変化

森 明雄（京大・霊長研）

討論者：高畑由起夫（京都大・理）、長谷川寿一（東大・教養）ほか

世話人：杉山幸丸、大沢秀行、森 明雄、渡辺邦夫、鈴木 晃

3, 4, 5 は勝山餌づけ集団と霊長研放飼集団で、攻撃、伴食、連合等の社会交渉の観察を通じて、発達過程で母親の順位の影響を受けながら自らの順位が形成される機構に迫ろうとした。2 は志賀地獄谷 A 群で、どのような社会交渉が特定の家系の“繁栄”をもたらすかを探った。そして 6 は幸島群の長期資料の分析から、人口学的繁栄が単なる上厚下薄ではないという結果を示して、優劣による戦略のちがいを探ろうとした。最終的に、優劣による繁栄の差が自然環境においてどのようにおきているかを採食行動から探ったのが 1 であった。計画研究の初年度であり明確な結論には至ってないが、優劣順位の内容に詳細な検討が加えられる一方、自然環境に問題を投げ返してみる努力も成果を挙げつつあることを示していた。

（文責 杉山幸丸）